

中国電影大觀

★★★★



マジック・キッチン(魔幻厨房)

2005(平成17)年10月10日鑑賞(パラダイスクエア)

監督＝李志毅 / 出演＝鄭秀文 / 言承旭 / 劉德華 / マギー・Q / 張榮悅 / 王敏德 / 黃秋生 (ツイン、東京テアトル配給 / 2004年香港映画 / 105分)

第8章

トレンドイ恋愛から禁じられた関係まで

…… 2作目の『マジック・キッチン』は、母直伝のレシピによって私房菜館を経営する女性シェフを演ずる鄭秀文を中心に、F4の言承旭とベテラン俳優劉德華の3人が共演。鄭秀文を中心とした女3人組は大の親友だが、恋へのアプローチ方法はかなりバラバラ。したがってそこから生まれるさまざまな恋のドラマはダブル不倫(?)も含めて大いに見ごたえあり……。さらに、香港版『料理の鉄人』への出場を軸とする料理へのこだわりもさすが料理の本場香港と感心させる面白いもの。ちょっと都会的で複雑なラブ・コメディをじっくりと……。

■主人公の女性シェフの原体験は……?

この映画の主人公は、今は香港で「私房菜館」を経営している女性シェフの慕容優(サミー・チェン)。

彼女の母親は香港で料理人を目指したが、当時料理はやはり男の世界であり、女には大きなハンディキャップがあったらしい。そんな中で夫と別れ、娘のヨウと2人の生活を続けた母親は毎日丹精こめた料理を作り、それを食卓に出していたということがこのヨウの口から語られる。

そんな母親の料理へのこだわりと父親との別れを幼い頃に体験したヨウが学んだことは、ヨウの家系では代々女性がシェフになるということ。しかしその反面、愛する男性とは決して結ばれないという何とも酷な運命にあるらしい……。こんな原体験を心の奥底に残しながら成長したヨウは、今は母直伝のレシピによって「私房菜館」を

経営し、それなりに順調な業績をあげている。しかし、ヨウにとって料理とは母親におけるそれのような特別なものではなく、単なる生計の手段にすぎなかった。したがって、香港版の「料理の鉄人」に出演するには大きな抵抗が……？

舞台は香港&東京

この映画は香港と東京を「股にかけた」映画で、中国人観客向けに(?)、東京のお台場、汐留、神楽坂という「名所」を登場させている。また、下町風景としては、新宿南口ガード下のラーメン屋や女3人が集まるおしゃれな新宿の喫茶店も……。

東京は人口密集都市だが、香港は東京以上に超高層ビルが林立した小さな都市。ヨウの住居やレストランは香港の中心部の上環、中環にあるが、女3人組がよく集まる「消防士が経営するバー」は海を渡った向こう側の尖沙咀にある。この映画を楽しむためには香港と東京の地図の勉強が不可欠だ。

ちなみに助手の郭可立グオ・クーリー(ジェリー・イエン)がヨウに対して「愛してる！」と大声で叫ぶ舞台は香港の「崇光百貨」であり、逆にヨウがクーリーに対して「愛してる！」と大声で叫ぶ舞台は川崎の「ラチッタデッラ」というところ……。

東京での出会いは？

今ヨウが東京に来ているのは、日本の料理番組への出演依頼を受けたため。そんな時、ヨウが5年ぶりに偶然出会ったのが、元カレの傳 佑チュアンヨウ(アンディ・ラウ)。もっともこの出会いは、お互いの車をぶつけたためという不幸な出会いだった。急いでいたチュアンヨウは、とりあえずホテルの部屋と電話番号をヨウに伝え、電話してくれと言ったが、さてそれは本心、それとも社交辞令……？

そこで、チュアンヨウに対して今でも未練タップリのヨウがとった行動は、興味深いもの。

その争点は、第1に、彼女はチュアンヨウのホテルに電話したのか否か、そして第2に電話しなかった場合、彼女はどのような行動をとったのか、ということ。さて、あなたの予想は……？

ヨウの側にはいつもクーリーが……？

ヨウのお店「私房菜館」の助手をつとめているのがクーリー。したがって、東京行

きにもこの助手が同行していたのは当然。これが結構いい男なのだが、ヨウはあくまで仕事上のパートナー、助手としてしか彼を見ていないため、彼が彼女に好意を持っていることはわかっていても、それはあえて無視……。したがって、元カレと出会ったヨウは、クーリーをスケベそうな観光客案内に委ねて、自分は別行動を……。

ところがいつの間にか、2人は広い東京の街のど真ん中で、再び出会うことに……。こりゃひょっとして何かを暗示しているのかも……？

興味深いヨウとチュアンヨウとの微妙な関係

チュアンヨウのことを元カレと言ったが、それは実は不正確。ヨウの説明によると、少なくとも彼女は彼と別れたという自覚は持っていないし、客観的に見てもそれが正しそう。

チュアンヨウとヨウはもともと同じ会社の先輩と後輩で、お互い好意を持って社内恋愛を育んでいたもの。ところが、シェフとなった女性は愛する男性と結ばれないというヨウ家の「呪い」によって(?)、ヨウとチュアンヨウが「いざベッドイン!」という局面になると、いつも必ず何らかのトラブルが起こるらしい。そのトラブルとは、例えば火事の発生、ホテルの部屋での別のアベックとの鉢合わせ、ベッドの崩壊etc.……。そんな中、お互いの生活状況の変化もあり、自然に離れていっただけというのが真相。したがって、決してこの2人は別れたわけではない……。しかして、その復活はあるのか、それともヨウ家の「呪い」はなお続くのか……？

女3人寄れば……？

「女3人寄ればかましい」というのは、古今東西の絶対的な真理であることが、この映画を観てもよくわかる。女3人とは、ヨウの他、ヨウの友人の傅 薇^{フーウェイ}（マギー・Q）と紫葵^{クウエイ}（ニコラ・チャン）の2人。フーウェイは恋愛に関してはものすごい「発展家」で、いつも恋愛のターゲットを探しており、それは決して曲げることでできない彼女の人生哲学……？

このフーウェイがヨウに紹介したのが、尖沙咀にある消防士の経営するバー「クラブ・ハバナ」だが、どうもここが彼女の恋愛作戦の根城らしい……。こんなフーウェイだから、ヨウとチュアンヨウが5年ぶりに再会しても全然その仲が進展していないと見てとると、たちまちチュアンヨウに対してモーションをかけたらしく、いつの

間にかフーウェイとチュアンヨウはいい仲に……。

ヨウのもう1人の友人クウェイも、れっきとした彼氏トニー（アンソニー・ウォン）がいたのだが、いつの間にかいろいろとややこしいことに……。

それにしても、女3人の会話はかしましいだけではなく、かなりコワイものがある……？

ダブル不倫も恋愛のうち……？

映画の中盤には、東京神楽坂にあるしゃぶしゃぶの高級店が登場する。奥の座敷の予約はヨウがしたもので、6名様ご一行らしい。まずはヨウとクーリーが着席。続いて、クウェイとトニーが登場し、最後に遅れて、フーウェイとチュアンヨウが……。本当はこの男女3人ずつの友人合計6名で楽しく、日本式しゃぶしゃぶに舌鼓を打つ予定だった……。

ところがここで、フーウェイから思いがけない重大な告白が……。それは、一種の身分詐称も含めたダブル不倫の告白だが、フーウェイに言わせればそれも恋愛のうち……？

そんな事態になれば、ドタバタ劇が発生すること自体は仕方ないとしても、何も日本的高级しゃぶしゃぶ店でやらなくても……。

4人が順次席を立て、残ったのはヨウとクーリーの2人だが、さらにここから展開されるヨウの未練たらしい行動にはビックリ……。

そう、ヨウはこの期に及んでなお、失意にあるチュアンヨウを求めて外へ飛び出していったのだった。これでは、1人残されたクーリーがあまりにもかわいそう……。

若いのに我慢強いクーリー！

この映画は、ヨウを中心とした女3人組を中心に物語が展開していくもので、男たちはおおむねそれに振り回されている感じ……。特にチュアンヨウは、ヨウと再会した後はフーウェイとうまくやっていたつもりだが、1人の男に満足できないフーウェイはさらなるつまみ食い(?)をしてしまう始末で、結局はフーウェイに振り回される羽目に……。

これに対して、クーリーは一貫してヨウの料理の助手をつとめるとともに、若さに似合わず、ヨウの恋の悩みもうまく受け止めていた。さらに、ヨウが命の次に大切に

しているレシピについても、必要以上の興味を示さず、忠実にヨウの助手としての任務を果たしていた。そんなクーリーの若さに似合わぬ我慢強さに感心していたが……。

恋と料理のバトルの行方は……？

この映画は2時間弱の上映時間ながら、香港と東京を股にかけ、恋と料理のバトルをテーマとしてたくさんの人間模様が紹介されていく、非常にテンポのいい映画。主人公のヨウは、ややもすれば貧乏クジを引きがちになるのだが、それを慰め、受け止める役目を果たすのはいつもクーリー。

そんな中、ヨウが、元カレであるチュアンヨウとの復縁に失敗(?)したり、香港版「料理の鉄人」でのチャレンジの結果をかみしめる中、ヨウの心の中においても恋と料理の2つの道において1番大切な男性は誰なのかということが、次第に明らかに……。さて、この映画では、どんなハッピーエンドが待ち受けているのだろうか……？

2005(平成17)年10月12日記